

鬼灯

園田明男

春から初夏にかけて、ホオズキの鉢物が街の店先を飾る。真っ赤な実が目を引くホオズキは、種類によって一年草や多年草の植物だが、私は大きな実をつけた鉢が奇麗なため売られているのだと単純に思っていた。しかし、そうではないらしい。

特に東京の浅草では、浅草ほおずき市として有名である。遠い昔、江戸時代、江戸の街ではホオズキが庶民の間で爆発的に流行ったという。その背景には、この時代、現在に通じるロウソクが発明されたことが要因にあるらしい。電気がなかった時代、ロウソクは簡単に火を点ければ灯りになるわけで、それにより江戸の町で市が昼夜盛大に行われることとなったのが原因だというのが、私としてはあまり納得できる話ではない。しかし庶民の間で盛大に行われたのは事実で、その流れが現代まで続いて

いるのだという。

お盆の正式名称は盂蘭盆経うらぼんぎょうという御経が由来の、盂蘭盆会ぼんえまたは盂蘭盆という。日本で初めてお盆が開催されたのは、六〇六年、推古天皇が「推古天皇十四年七月十五日齋会」という行事を行ったのが始まりとされている。

お盆には亡くなったご先祖さまが年に一度帰ってくるといわれていて、ホオズキは帰ってくる先祖の人々を導く提灯に見立てたことが始まりで、無病息災を願う魔除けとして飾られてきたことも由来らしい。

私の住むこの地方では、帰ってくるご先祖さまの道案内で足元を照らすのは、何とキツネとのことだ。なぜキツネなのかわからないが、あまり知られていないが薩摩半島には今でもキツネが多くいるのだ。

鹿児島は、湾としてはおそらく日本で一番大きな錦江

灣を挟んで、大隅半島と薩摩半島に分かれている。大隅半島は薩摩半島よりさらに大きく山も深い。高隈山という桜島と同等の千メートルを越す山もある。薩摩半島は高い山といえば薩摩富士と称される開聞岳があるが、この山も千メートルには届かない。しかし鹿児島市に近い南九州市の手叢峠や、川辺峠付近は山が深く、人がめつたに立ち入ることのない森が広がっている。此処をめぐらとするキツネは、おそらく人間も入ってこない森林のため、安心して生活しているのだ。

北海道に生息する小型のキタキツネはよく知られているが、この辺に棲むのは、尻尾の先が大きく丸く膨らんだ大型のキツネなのだ。しかしそのことはあまり知られていない。

南九州市川辺町の農家の庭先には、住民がキツネに餌付けをしているため、子供連れのキツネが毎晩のように訪れるという。親子連れの彼らは、たまたま餌を求めて農家の庭先に来たところを、その住人が彼らに餌を与え、キツネとの交流が始まったと聞く。毎晩八時頃になると藪の中から音もなくそとと現れ、餌を戴くとまたやぶの中へ帰って行くという。

川辺の農家に現れるキツネを見たことは無いが、実は私も最近、仕事の帰りにキツネに遭遇したことがある。

夕方、辺りが薄暗くなり始めた頃、私が運転する車の前方五十メートル程度で交差する農道を、鶏が百万羽ちかくいる巨大な養鶏所の方へ歩いて行くキツネを見た。

犬が交差点を通過してしばらく進むと立ち止まり、こちらを振り向き、じっと私を見ている。何かおかしいで私も車を止めてその犬を見ていた。彼は体を捻じ曲げ、後ろを振り向いて私を観察している。犬はこのような仕草はしない、何か変だと思ったとき、しつぽの先端が大きく膨らんでいるのを見て、犬ではなくキツネだと確信したのだ。私をじっと見つめ、自分に危害を加える者ではないことを確認すると、とことと養鶏所の方に歩き出した。巨大な養鶏所のため何らかの理由で巣箱を抜け出した鶏が何羽かいて、彼はそれを食用にするため行動しているのだ。逃げ出した鶏は、辺りを警戒することもないため簡単に捕まえられる。

最近ではこの辺りでも、人間が使用する農薬のためと思われるが、彼らの餌となるウサギや野ネズミなどの小動物が少なくなつた。逆に農薬の影響をあまり受けない大型のイノシシやシカ、サルなどは以前より増加し、農家の作物などに影響を及ぼしている。

昭和十九年生まれの方は小さい頃、イノシシなど見たことはなかったが最近、私が彼らの近くにいても人間な

どに関心ないというふうには、鼻で地面をほじくり返し、ミミズなどを食べている姿を何度か見ている。

薩摩半島のキツネも苦勞して餌を求めて歩き回るより、逃げ出した鶏や、農家の庭先へ来て人間から食べ物を貰う方が楽なのだ。キツネは何も言わないが、食べ物を与える人間に対して感謝している筈だ。

彼らも此処のご先祖が帰ってくる盆の夜は、道に迷わないように真っ赤な実を灯りに見立てた鬼灯の提灯で道案内をしてくれるのだろう。

なぜ鬼の灯と書いてホオズキと読むのか、これは熟字訓じゅくくんという読み方らしい。この地域のことを考えれば「狐灯」と書いてホオズキと読ませるのが相応しいと思うが、どうだろう。
